

(3) 障害者入所施設のスポーツ環境に関する調査

主な調査結果

入所施設の 8 割がスポーツ・レクリエーション大会に参加

外部のスポーツ・レクリエーション大会に参加している施設は 8 割であった。参加している主な大会は、「全国障害者スポーツ大会やその都道府県予選などの障害者スポーツ競技大会」や「市区町村等が主催する障害のある方のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会」である。知的障害者の施設は、身体障害者の施設よりもスポーツ・レクリエーション大会に参加する割合が高かった。また、7 割の施設において、スポーツ・レクリエーションに関する行事を実施していた。【図表 3-10、3-12、3-13】

身体障害者はふうせんバレー、体操、ボッチャ、知的障害者は散歩、体操、ウォーキングを実施

日中活動サービスにおいて、スポーツ・レクリエーションの機会を提供している施設は 8 割であった。日中活動サービスで行われている種目で実施率が高いのは、「散歩(ぶらぶら歩き)」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」「ウォーキング」であった。身体障害者が過半数の施設では、「ふうせんバレー」「体操」「ボッチャ」「散歩」、知的障害者が過半数の施設では、「散歩」「体操」「ウォーキング」「フライングディスク(フリスビー)」の実施率が高く、障害種別による違いが見られる。【図表 3-14、3-17、3-18、3-19】

活動場所は施設内の多目的室・ホールや施設周辺の歩道や公園など

スポーツ・レクリエーションの活動場所は、施設内の「多目的室・ホール等(屋内)」や「施設周辺の歩道や公園等」が多い。身体障害者が過半数の施設では、「多目的室・ホール」「訓練室・作業室」など、施設内での活動が中心だが、知的障害者が過半数の施設では、「施設周辺の歩道や公園等」、施設内の「庭や空き地等(屋外)」など、屋外や施設の外での活動も多くなっている。【図表 3-21、3-22】

スポーツ担当者の半数が専門の資格をもち、障害者スポーツ協会公認指導員は 1 割強

スポーツ・レクリエーション活動の担当者の半数は、スポーツの指導等に関する何らかの専門の資格を持っていた。スポーツに関する資格で最も取得者が多かったのは、日本障害者スポーツ協会公認指導員(13.8%)で、日本体育協会公認スポーツ指導者は 1%程度で少なかった。【図表 3-24】

誰もが参加できる種目や、専門性がなくても指導しやすい種目を実施

利用者にスポーツ・レクリエーション活動を提供する際の運営上の工夫については、「障害の種類や程度にかかわらず、誰もが参加できる種目を行っている」「経験や専門性がなくても指導しやすい種目を行っている」などが多かった。【図表 3-27】

競技経験者や障害者スポーツ団体関係者がいる施設はスポーツに積極的

事例調査から、競技経験者や障害者スポーツ団体関係者が職員として働いている施設では、日常の活動や施設の行事等に、スポーツ・レクリエーションを積極的に取り入れていることが明らかとなった。これらの施設では、障害者のスポーツ大会や一般のスポーツ大会への参加を通じて、他の施設の障害者や地域の健常者との交流を図っている。

1. 調査概要

1.1 調査目的

本調査は、全国の障害者入所施設を対象に悉皆(しっかい)調査を行い、入所施設に関する基本情報、スポーツ・レクリエーション活動の提供状況、外部の大会等への参加状況、実施種目、活動場所、指導者、運営上の工夫や課題など、障害者の日常生活の場である入所施設におけるスポーツ・レクリエーション活動に関する情報を整理、把握することで、今後の方策検討における基礎情報とすることを目的として実施した。

1.2 調査対象

全国の障害者入所施設(2,454 施設)を対象とした。

1.3 調査方法

【調査1】質問紙調査

(1) 調査方法

施設入所支援のサービスを提供している全国の障害者入所施設(2,454 施設)に対して、郵送法による質問紙調査を実施した。

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・施設属性(施設の基本情報、施設入所者)
- ・スポーツ・レクリエーションに関する行事の開催
- ・外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加
- ・日中活動におけるスポーツ・レクリエーション(実施状況、実施種目、参加形態)
- ・スポーツ・レクリエーションの活動場所
- ・スポーツ・レクリエーション活動の担当者と資格
- ・運営上の工夫
- ・支援・協力体制
- ・地域社会や施設外の障害者との交流
- ・利用者の余暇や休日における自主的なスポーツ・レクリエーション活動の状況
- ・スポーツ・レクリエーション活動全般に関する課題

(3) 回収結果

回収数(率)は、1,494(60.9%)であった。

定員数及び平均年齢の回答を基に、1,411 施設を分析対象とした。

(4) 調査期間

2013年10月18日～2013年11月26日

【調査2】事例調査（ヒアリング調査）

(1) 調査方法

地域の障害者入所施設におけるスポーツ・レクリエーション活動の状況を明らかにするため、担当者に対して聞き取り調査を実施し、3件の障害者支援施設の事例をまとめた。

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・施設の基本情報(設立経緯、事業内容・定員、職員数、利用者の状況)
- ・スポーツ・レクリエーション活動の目的と基本方針
- ・スポーツ・レクリエーション活動に関する行事の開催
- ・外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加
- ・日中活動サービスとしてのスポーツ・レクリエーション活動(活動頻度、実施種目、活動形態)
- ・担当者と資格
- ・運営上の工夫
- ・支援・協力体制
- ・地域社会や施設外の障害者との交流
- ・スポーツ・レクリエーション活動の課題

(3) 調査期間

2013年11月～2014年2月

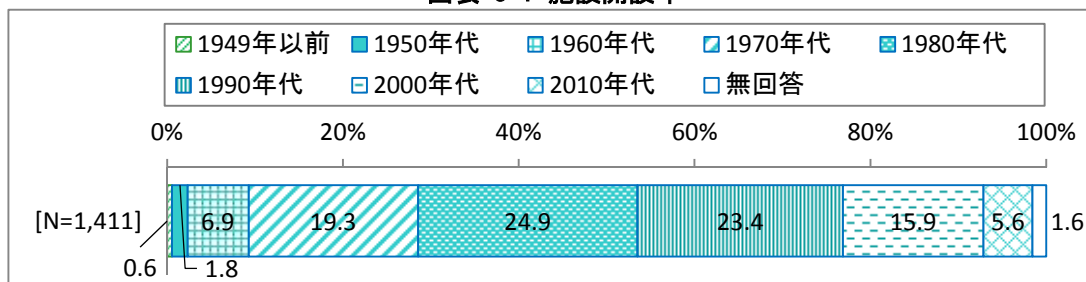
2. 調査結果(質問紙調査)

2.1 施設属性

(1) 施設の基本情報

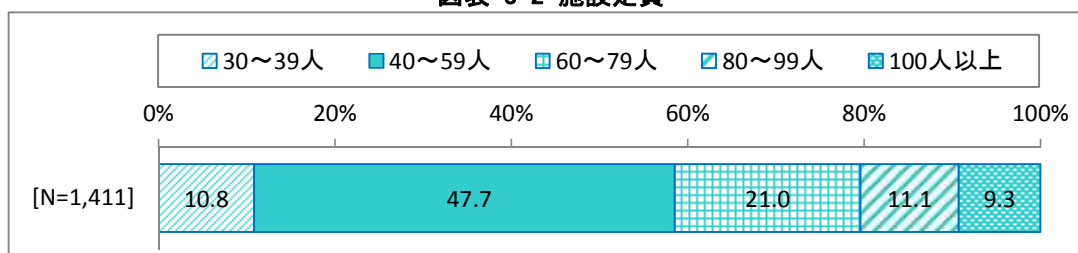
施設開設年は、「1980年代」が24.9%で最も多く、次いで「1990年代」(23.4%)、「1970年代」(19.3%)であった(図表3-1)。

図表 3-1 施設開設年



施設の規模を示す施設定員は、「40～59人」が47.7%で最も多く、次いで「60～79人」が21.0%であった(図表3-2)。

図表 3-2 施設定員



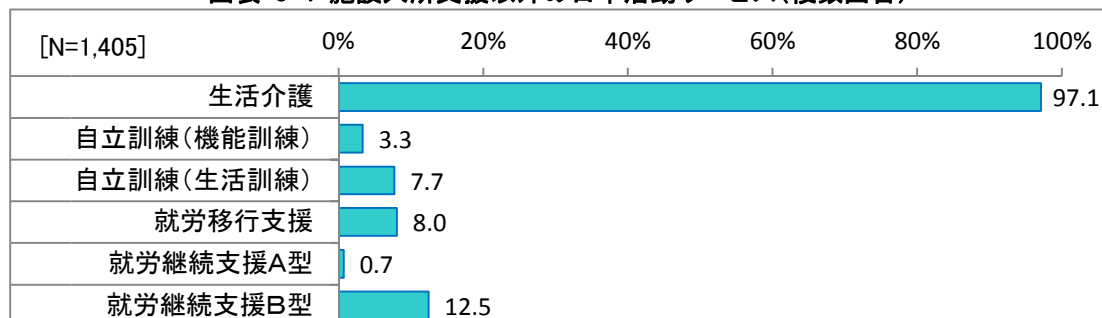
平均職員数は、回答施設全体で40.0人であり、雇用形態別に見ると常勤職員数は平均33.6人、非常勤職員数は平均8.7人であった(図表3-3)。

図表 3-3 平均職員数(施設定員別)

		施設定員別					
		全体 N=1,411	30～39人	40～59人	60～79人	80～99人	100人以上
平均職員数	全体	40.0	24.0	33.4	40.2	52.4	77.5
	常勤	33.6	18.8	27.8	34.6	45.5	64.0
	非常勤	8.7	5.9	7.4	9.0	10.1	15.9

施設入所支援以外の日中活動サービスの実施状況について、「生活介護」が97.1%で最も多かった(図表3-4)。

図表 3-4 施設入所支援以外の日中活動サービス(複数回答)



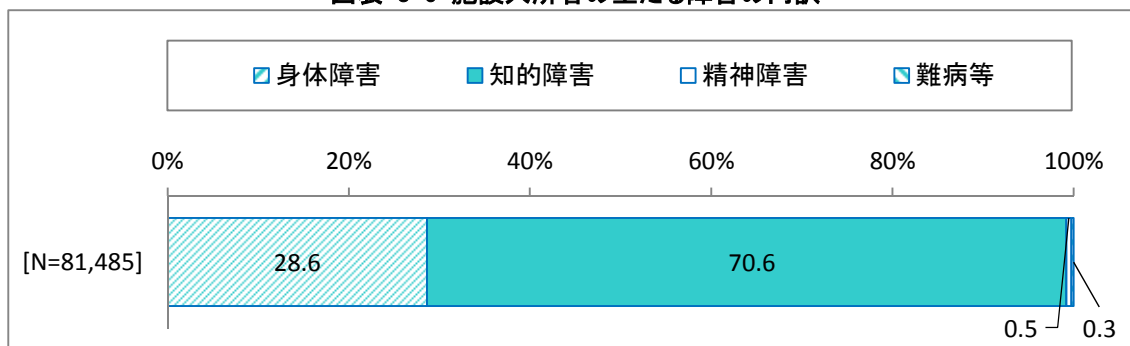
(2) 施設入所者

分析対象の1,411施設における入所者数は全体で81,485人であった(図表3-5)。施設入所者の主たる障害の内訳は、知的障害が70.6%で最も多く、次いで身体障害が28.6%であった(図表3-6)。

図表 3-5 施設入所者数(障害種別・施設定員別)

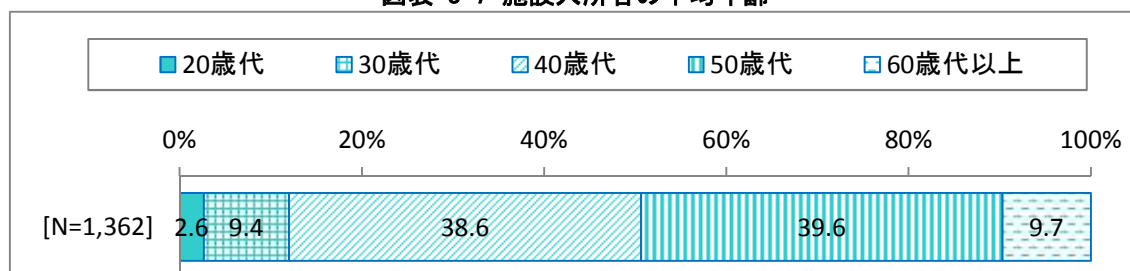
		全体	施設定員別				
		N=1,411	30~39人	40~59人	60~79人	80~99人	100人以上
入所者数 (障害種別)	全体	81,485	4,511	30,900	18,232	12,481	15,361
	身体障害	23,320	1,332	9,178	5,289	4,025	3,496
	知的障害	57,522	3,111	21,477	12,812	8,301	11,821
	精神障害	437	66	166	105	57	43
	難病等	206	2	79	26	98	1

図表 3-6 施設入所者の主たる障害の内訳



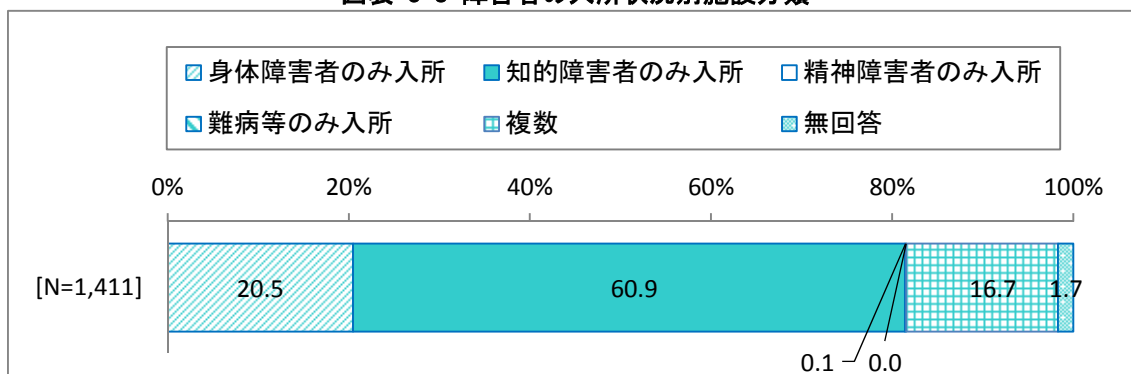
施設入所者の平均年齢は、「20歳代」が2.6%、「30歳代」が9.4%、「40歳代」が38.6%、「50歳代」が39.6%、「60歳代以上」が9.7%であり、全体の8割が中年期の入所者となっている(図表3-7)。なお、分析対象施設における平均年齢は49.3歳であった。

図表 3-7 施設入所者の平均年齢



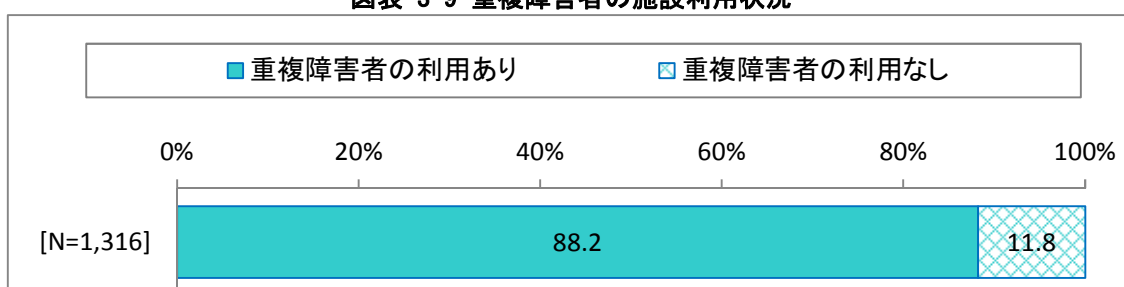
分析対象の1,411施設において、「身体障害者のみ入所」が20.5%、「知的障害者のみ入所」が60.9%であり、全体の約8割が身体障害又は知的障害に対応した施設となっている。(図表3-8)。複数の種類の障害に対応している施設は16.7%であるが、その多くが身体障害者と知的障害者の利用である。

図表 3-8 障害者の入所状況別施設分類



重複障害者の施設利用状況について、「重複障害者の利用あり」が88.2%、「重複障害者の利用なし」は11.8%であった(図表3-9)。

図表 3-9 重複障害者の施設利用状況



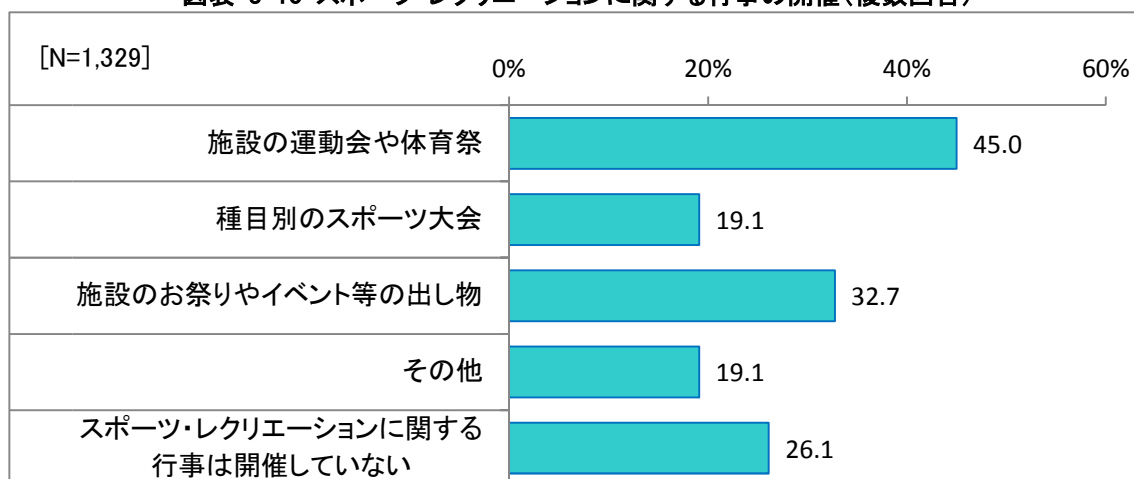
注) 重複障害者の利用状況に関する質問に回答した施設を対象に集計。

2.2 スポーツ・レクリエーションに関する行事の開催

スポーツ・レクリエーションに関する行事は、約 7 割の施設で実施されていた。行事の内容は、「施設の運動会や体育祭」(45.0%)が最も多く、次いで「施設のお祭りやイベント等の出し物」(32.7%)、「種目別のスポーツ大会」(19.1%)であった(図表 3-10)。一方、全体の4分の1の施設でスポーツ・レクリエーションに関する行事は開催していない。

入所者の平均年齢別に見ると、平均年齢が 50 歳代未満の施設では、平均年齢が 50 歳代以上の施設に比べて、「種目別のスポーツ大会」「施設のお祭りやイベント等の出し物」の割合が高い(図表 3-11)。

図表 3-10 スポーツ・レクリエーションに関する行事の開催(複数回答)



図表 3-11 スポーツ・レクリエーションに関する行事の開催(平均年齢別)(複数回答)

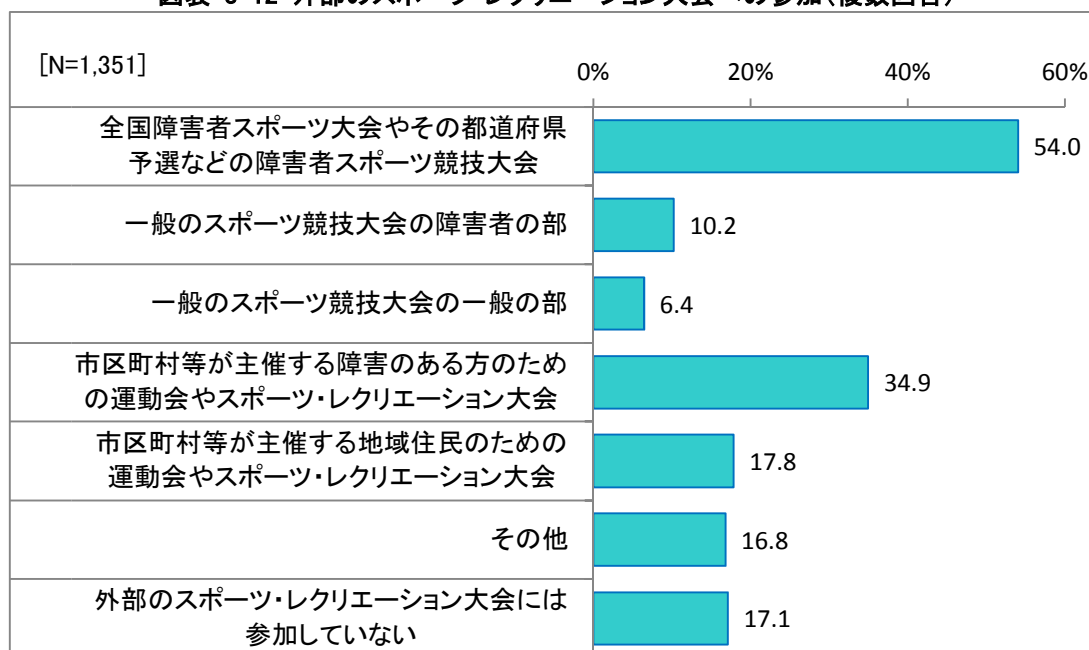
	平均年齢が 50歳代未満 の施設	平均年齢が 50歳代以上 の施設
	N=645	N=636
施設の運動会や体育祭	46.2%	44.3%
種目別のスポーツ大会	21.6%	17.0%
施設のお祭りやイベント等の出し物	35.7%	30.2%
その他	18.3%	19.8%
スポーツ・レクリエーションに関する行事は開催していない	25.9%	25.8%

2.3 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加

外部のスポーツ・レクリエーション大会には、約 8 割の施設が参加していた。大会の内容は、「全国障害者スポーツ大会やその都道府県予選などの障害者スポーツ競技大会」(54.0%)が最も多く、次いで「市区町村等が主催する障害のある方のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会」(34.9%)であった(図表 3-12)。「その他」(16.8%)は、障害者施設協議会が主催するスポーツ大会、障害者福祉協会が主催するスポーツ大会などであった。

障害種別に見ると、知的障害が過半数の施設の方が、身体障害が過半数の施設に比べて、外部のスポーツ・レクリエーション大会に参加している割合が高い(図表 3-13)。

図表 3-12 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加(複数回答)



図表 3-13 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加(障害種別)(複数回答)

	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=382	N=943
全国障害者スポーツ大会やその都道府県予選などの障害者スポーツ競技大会	48.2%	56.5%
一般のスポーツ競技大会の障害者の部	9.2%	10.3%
一般のスポーツ競技大会の一般の部	1.6%	8.4%
市区町村等が主催する障害のある方のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会	29.8%	37.3%
市区町村等が主催する地域住民のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会	9.2%	21.2%
その他	15.2%	17.7%
外部のスポーツ・レクリエーション大会には参加していない	25.9%	13.3%

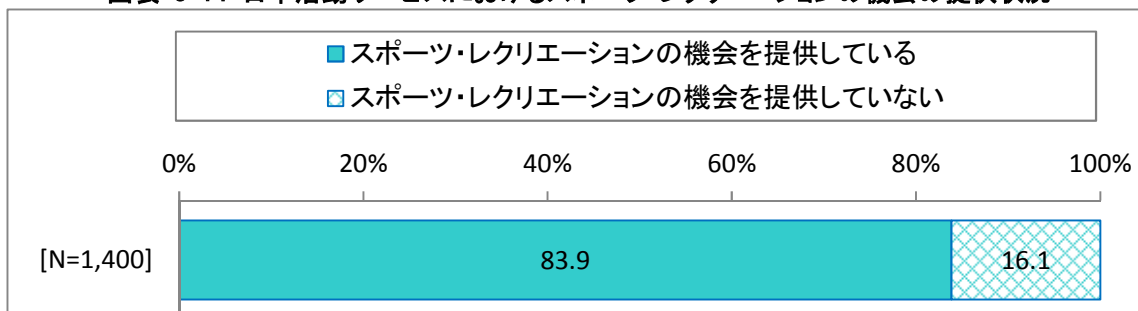
注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各 2 施設であったため、障害種別の集計はしていない。

2.4 日中活動におけるスポーツ・レクリエーション

(1) 実施状況

日中活動サービスにおけるスポーツ・レクリエーションの機会の提供状況について、「提供している」は83.9%、「提供していない」は16.1%であった(図表 3-14)。

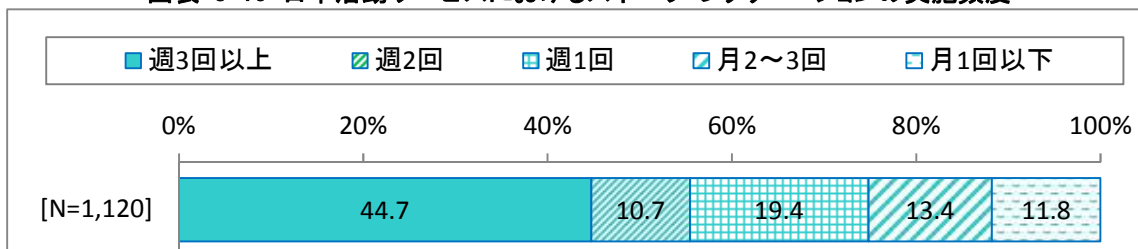
図表 3-14 日中活動サービスにおけるスポーツ・レクリエーションの機会の提供状況



実施頻度について、週3回以上が44.7%、週2回が10.7%、週1回が19.4%であり、全体の約7割が週1回以上のスポーツ・レクリエーション活動を実施している(図表 3-15)。

障害種別に見ると、知的障害が過半数の施設では、51.1%が「週3回以上」と回答している(図表 3-16)。

図表 3-15 日中活動サービスにおけるスポーツ・レクリエーションの実施頻度



図表 3-16 日中活動サービスにおける
スポーツ・レクリエーションの実施頻度(障害種別)

実施頻度	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=303	N=799
週3回以上	29.0%	51.1%
週2回	9.6%	11.4%
週1回	26.7%	16.5%
月2~3回	18.5%	11.1%
月1回以下	16.2%	9.9%

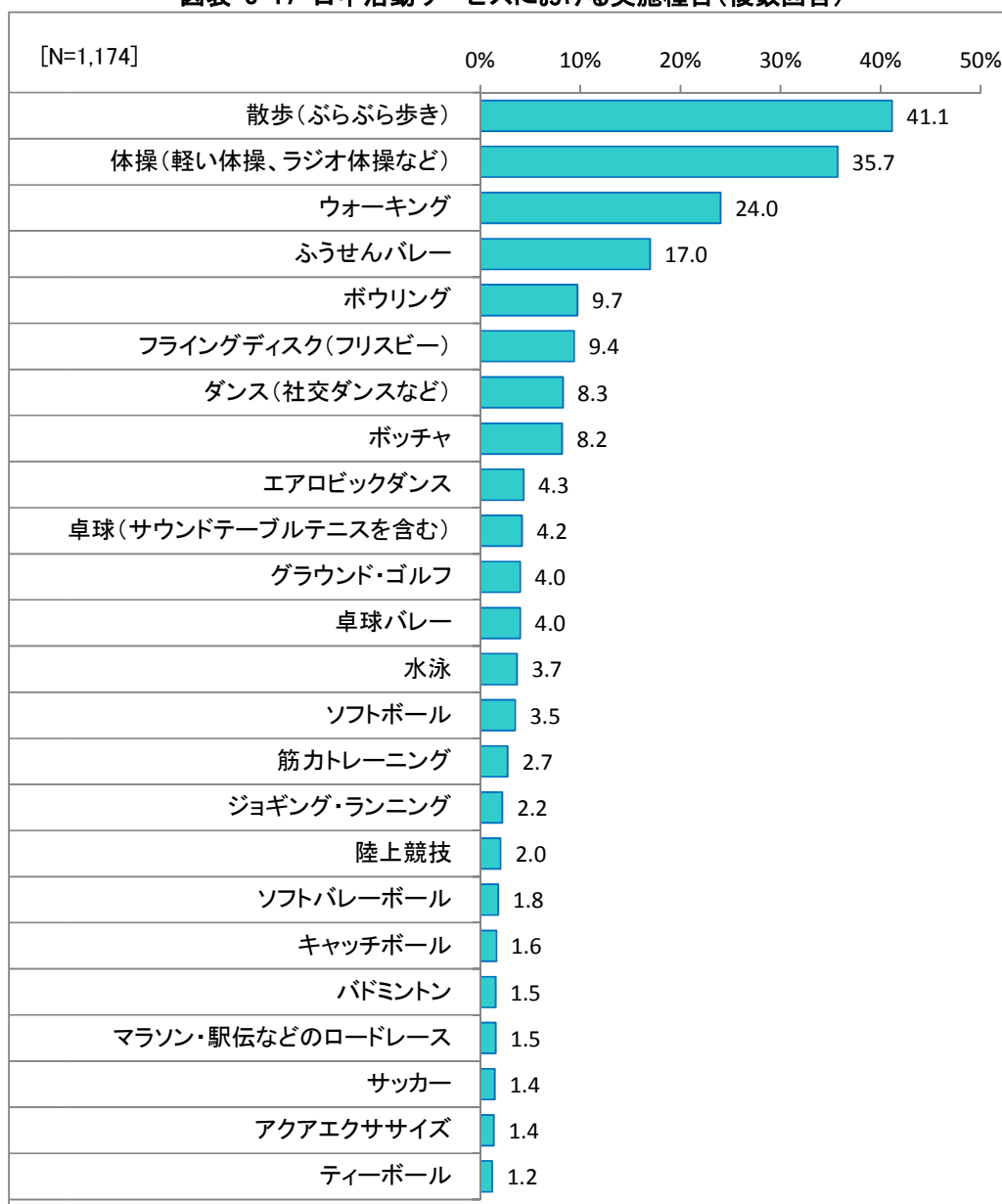
注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各2施設であったため、障害種別の集計はしていない。

(2) 実施種目

日中活動サービスにおけるスポーツ・レクリエーション種目については、「散歩(ぶらぶら歩き)」(41.1%)が最も多く、次いで「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」(35.7%)、「ウォーキング」(24.0%)であった(図表 3-17)。

障害種別に見ると、身体障害が過半数の施設では、「ふうせんバレー」(38.8%)が最も多く、体操や散歩の他に「ボッチャ」(26.9%)や「ボウリング」(17.8%)が上位に入る(図表 3-18)。知的障害が過半数の施設では、散歩、体操、ウォーキングの実施割合が高く、次に「フライングディスク(フリスビー)」(9.9%)や「ダンス(社交ダンスなど)」(9.6%)が上位種目となっている(図表 3-19)。

図表 3-17 日中活動サービスにおける実施種目(複数回答)



図表 3-18 実施種目(身体障害が過半数の施設)

身体障害が過半数の施設		
順位	種目	N=320
1	ふうせんバレー	38.8%
2	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	27.2%
3	ポッチャ	26.9%
4	散歩(ぶらぶら歩き)	21.6%
5	ボウリング	17.8%
6	卓球バレー	11.3%
7	フライングディスク(フリスビー)	7.5%
8	卓球(サウンドテーブルテニスを含む)	5.6%
9	ダンス(社交ダンスなど)	5.0%
10	陸上競技	3.8%
11	ウォーキング	3.4%
12	グラウンド・ゴルフ	2.8%
13	筋カトレニング	2.5%
14	エアロビックダンス	1.3%
14	ソフトバレーボール	1.3%
14	釣り	1.3%
14	バレーボール	1.3%
18	水泳	0.9%
18	ソフトボール	0.9%
18	ゲートボール	0.9%

図表 3-19 実施種目(知的障害が過半数の施設)

知的障害が過半数の施設		
順位	種目	N=850
1	散歩(ぶらぶら歩き)	49.5%
2	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	38.7%
3	ウォーキング	31.9%
4	フライングディスク(フリスビー)	9.9%
5	ダンス(社交ダンスなど)	9.6%
6	ふうせんバレー	8.2%
7	ボウリング	6.2%
8	エアロビックダンス	5.5%
9	水泳	4.7%
10	ソフトボール	4.6%
11	グラウンド・ゴルフ	4.1%
12	卓球(サウンドテーブルテニスを含む)	3.5%
13	ジョギング・ランニング	3.1%
14	筋カトレニング	2.8%
15	キャッチボール	2.2%
16	サッカー	1.9%
16	ソフトバレーボール	1.9%
18	マラソン・駅伝などのロードレース	1.8%
18	アクアエクササイズ	1.8%
20	バドミントン	1.6%

注) 図表 3-18、図表 3-19 について、精神障害及び難病等が過半数の施設は各 2 施設であったため、障害種別の集計はしていない。

(3) 参加形態

上位 15 種目の参加形態について、いずれも任意参加としている施設の割合が高いが、散歩(ぶらぶら歩き)、体操(軽い体操、ラジオ体操など)、ウォーキングについては 2~3 割程度の施設で全員参加としている。一方、水泳、ソフトボール、卓球(サウンドテーブルテニス)、フライングディスク(フリスビー)などは、任意参加(半数未満)の施設の割合が高い(図表 3-20)。

図表 3-20 実施種目と参加形態(複数回答)

順位	実施種目	N=1,174	参加形態			
			全員参加	任意参加 (半数以上)	任意参加 (半数未満)	無回答
1	散歩(ぶらぶら歩き)	41.1%	22.4%	41.4%	35.2%	1.0%
2	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	35.7%	36.0%	40.1%	23.4%	0.5%
3	ウォーキング	24.0%	24.8%	41.5%	33.0%	0.7%
4	ふうせんバレー	17.0%	8.0%	31.7%	58.3%	2.0%
5	ボウリング	9.7%	11.4%	23.7%	62.3%	2.6%
6	フライングディスク(フリスビー)	9.4%	6.4%	23.6%	68.2%	1.8%
7	ダンス(社交ダンスなど)	8.3%	12.4%	39.2%	48.5%	0.0%
8	ポッチャ	8.2%	6.3%	28.1%	64.6%	1.0%
9	エアロビックダンス	4.3%	11.8%	52.9%	31.4%	3.9%
10	卓球(サウンドテーブルテニスを含む)	4.2%	2.0%	18.4%	77.6%	2.0%
11	グラウンド・ゴルフ	4.0%	8.5%	27.7%	59.6%	4.3%
11	卓球バレー	4.0%	6.4%	23.4%	68.1%	2.1%
13	水泳	3.7%	2.3%	11.6%	86.0%	0.0%
14	ソフトボール	3.5%	7.3%	9.8%	78.0%	4.9%
15	筋カトレニング	2.7%	9.4%	50.0%	40.6%	0.0%

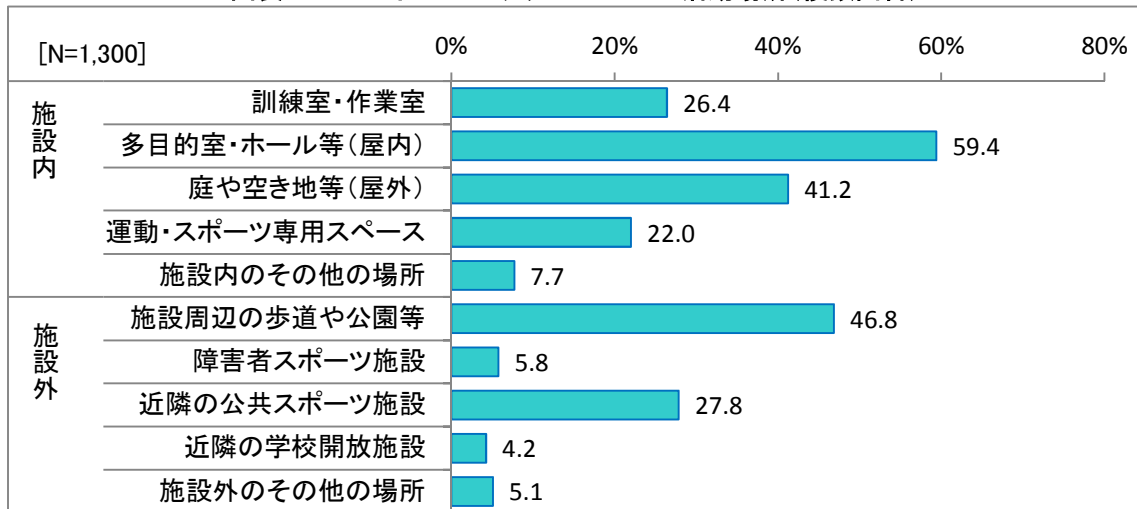
注) 任意参加で実施しているスポーツ・レクリエーション活動に入所者の半数以上が参加していると回答した場合は「任意参加(半数以上)」、半数未満と回答した場合は「任意参加(半数未満)」とした。

2.5 スポーツ・レクリエーションの活動場所

スポーツ・レクリエーションの活動場所について、施設内では「多目的室・ホール等(屋内)」(59.4%)が最も多く、次いで「庭や空き地等(屋外)」(41.2%)、「訓練室・作業室」(26.4%)であった。施設外では、「施設周辺の歩道や公園等」(46.8%)が最も多く、次いで「近隣の公共スポーツ施設」(27.8%)であった(図表 3-21)。

障害種別に見ると、身体障害が過半数の施設では、「多目的室・ホール等(屋内)」が 67.5%、次いで「訓練室・作業室」(34.4%)となっており、施設内の特定の場所での活動が多い(図表 3-22)。一方、知的障害が過半数の施設では、施設内の「庭や空き地等(屋外)」(46.5%)の他、「施設周辺の歩道や公園等」(57.3%)や「近隣の公共スポーツ施設」(31.2%)など、施設外で活動する施設の割合も高い。

図表 3-21 スポーツ・レクリエーションの活動場所(複数回答)



図表 3-22 スポーツ・レクリエーションの活動場所(障害種別)(複数回答)

活動場所		身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
		N=366	N=910
施設内	訓練室・作業室	34.4%	23.4%
	多目的室・ホール等(屋内)	67.5%	56.0%
	庭や空き地等(屋外)	28.1%	46.5%
	運動・スポーツ専用スペース	12.6%	25.8%
	施設内のその他の場所	10.1%	6.8%
施設外	施設周辺の歩道や公園等	22.1%	57.3%
	障害者スポーツ施設	7.4%	5.3%
	近隣の公共スポーツ施設	20.2%	31.2%
	近隣の学校開放施設	3.0%	4.8%
	施設外のその他の場所	2.7%	6.0%

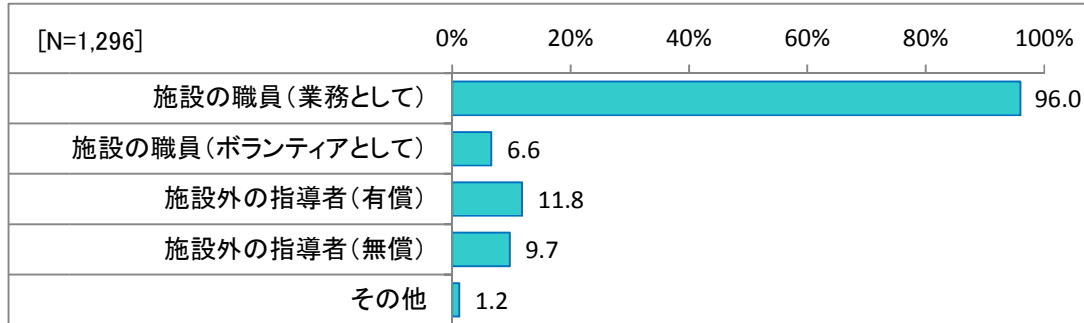
注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各 2 施設であったため、障害種別の集計はしていない。

2.6 スポーツ・レクリエーション活動の担当者と資格

(1) 担当者

スポーツ・レクリエーション活動の担当者について、「施設の職員(業務として)」(96.0%)が最も多く、次いで「施設外の指導者(有償)」(11.8%)、「施設外の指導者(無償)」(9.7%)であった(図表 3-23)。

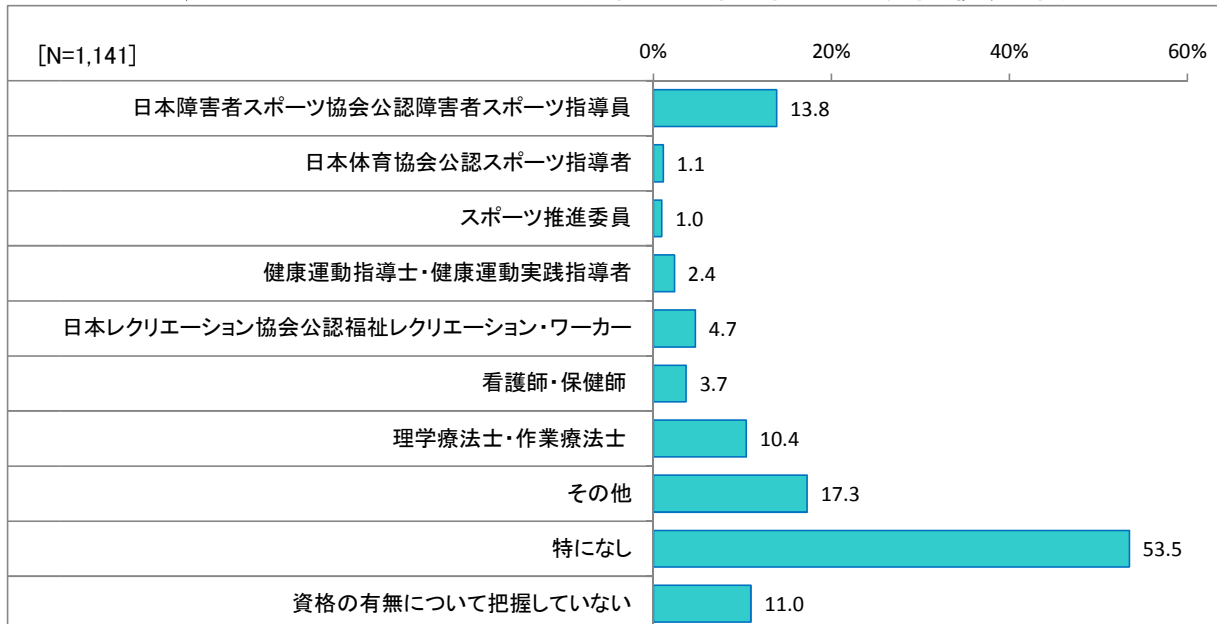
図表 3-23 スポーツ・レクリエーション活動の担当者(複数回答)



(2) 資格

担当者の資格について、「特になし」(53.5%)が最も多く、次いで「日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員」(13.8%)、「理学療法士・作業療法士」(10.4%)であった(図表 3-24)。「その他」(17.3%)は、介護福祉士、保育士、社会福祉士などであった。

図表 3-24 スポーツ・レクリエーション活動の担当者が有している資格(複数回答)



スポーツ関連の有資格者の有無別にスポーツ・レクリエーションに関する行事の開催状況を見ると、スポーツ関連の有資格者ありの施設では、有資格者なしの施設に比べて「施設の運動会や体育祭」「種目別のスポーツ大会」「施設のお祭りやイベント等の出し物」の割合が高い(図表 3-25)。

また、外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加についても、スポーツ関連の有資格者ありの施設では、有資格者なしの施設に比べて「全国障害者スポーツ大会やその都道府県予選などの障害者スポーツ競技大会」「一般のスポーツ競技大会の障害者の部」「一般のスポーツ競技大会の一般の部」「市区町村等が主催する障害のある方のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会」において高い割合を示した(図表 3-26)。

**図表 3-25 スポーツ・レクリエーションに関する行事の開催
(スポーツ関連の有資格者の有無別)(複数回答)**

	スポーツ関連の有資格者あり	スポーツ関連の有資格者なし
	N=251	N=584
施設の運動会や体育祭	55.8%	46.2%
種目別のスポーツ大会	33.1%	20.0%
施設のお祭りやイベント等の出し物	49.4%	32.7%
その他	25.9%	16.3%
スポーツ・レクリエーションに関する行事は開催していない	14.7%	23.8%

注) 担当者について、日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員、日本体育協会公認スポーツ指導者、スポーツ推進委員、健康運動指導士・健康運動実践指導者、日本レクリエーション協会公認福祉レクリエーション・ワーカーのいずれかに回答した場合は「スポーツ関連の有資格者あり」とし、特になしと回答した場合は「スポーツ関連の有資格者なし」とした。

**図表 3-26 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加
(スポーツ関連の有資格者の有無別)(複数回答)**

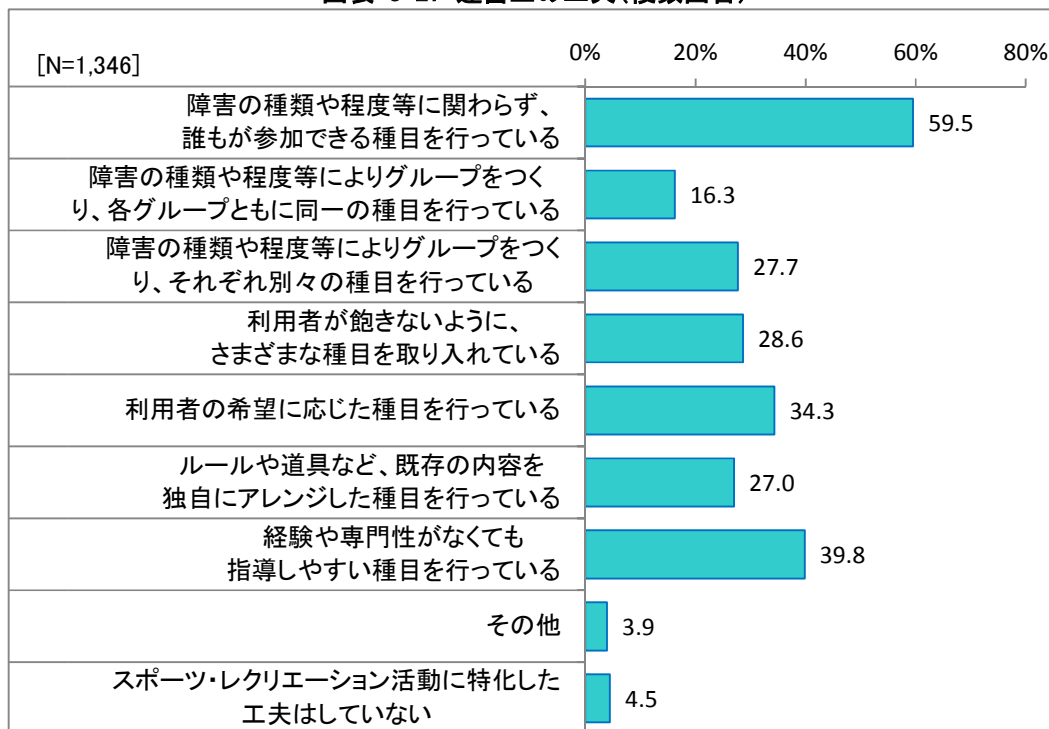
	スポーツ関連の有資格者あり	スポーツ関連の有資格者なし
	N=255	N=592
全国障害者スポーツ大会やその都道府県予選などの障害者スポーツ競技大会	76.1%	57.6%
一般のスポーツ競技大会の障害者の部	23.1%	8.6%
一般のスポーツ競技大会の一般の部	12.2%	5.9%
市区町村等が主催する障害のある方のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会	51.0%	33.4%
市区町村等が主催する地域住民のための運動会やスポーツ・レクリエーション大会	21.6%	20.8%
その他	14.9%	18.1%
外部のスポーツ・レクリエーション大会には参加していない	4.3%	14.7%

注) 担当者について、日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員、日本体育協会公認スポーツ指導者、スポーツ推進委員、健康運動指導士・健康運動実践指導者、日本レクリエーション協会公認福祉レクリエーション・ワーカーのいずれかに回答した場合は「スポーツ関連の有資格者あり」とし、特になしと回答した場合は「スポーツ関連の有資格者なし」とした。

2.7 運営上の工夫

利用者にスポーツ・レクリエーション活動を提供する際の運営上の工夫について、「障害の種類や程度等に関わらず、誰もが参加できる種目を行っている」(59.5%)が最も多く、次いで「経験や専門性がなくても指導しやすい種目を行っている」(39.8%)、「利用者の希望に応じた種目を行っている」(34.3%)であった(図表 3-27)。その他の項目としては、「音楽の利用」「明るい掛け声」など、楽しい雰囲気づくりに関する回答が見られた。

図表 3-27 運営上の工夫(複数回答)



図表 3-28 運営上の工夫(障害種別)(複数回答)

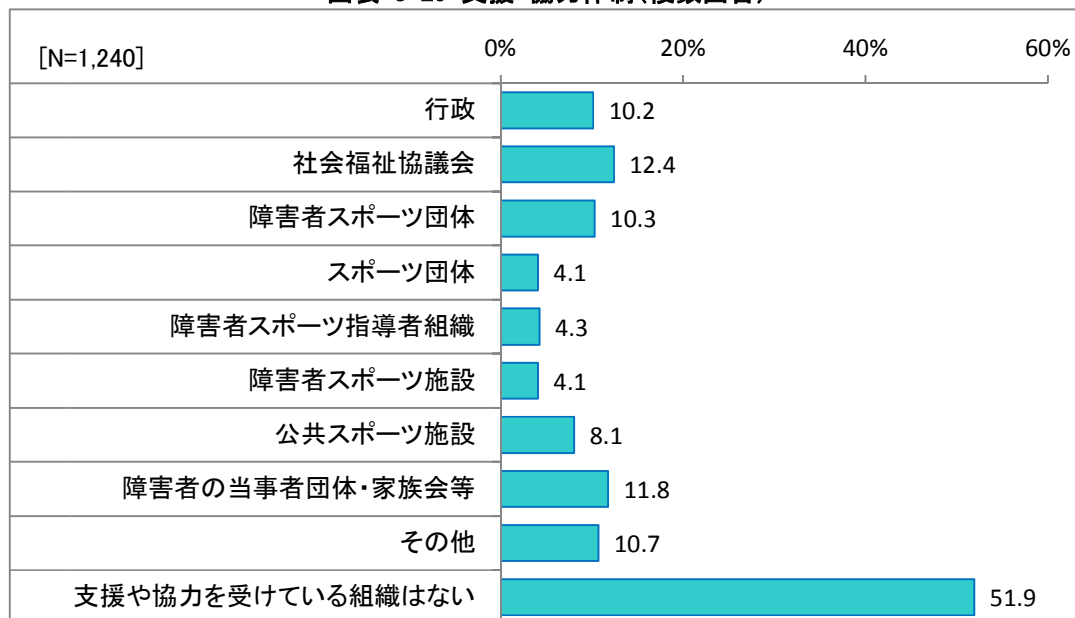
	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=359	N=893
障害の種類や程度等に関わらず、誰もが参加できる種目を行っている	71.0%	59.8%
障害の種類や程度等によりグループをつくり、各グループともに同一の種目を行っている	12.8%	18.8%
障害の種類や程度等によりグループをつくり、それぞれ別々の種目を行っている	17.0%	34.3%
利用者が飽きないように、さまざまな種目を取り入れている	36.2%	28.0%
利用者の希望に応じた種目を行っている	37.0%	35.8%
ルールや道具など、既存の内容を独自にアレンジした種目を行っている	41.5%	23.4%
経験や専門性がなくても指導しやすい種目を行っている	46.0%	41.2%
その他	5.0%	3.8%
スポーツ・レクリエーション活動に特化した工夫はしていない	2.5%	5.6%

注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各2施設であったため、障害種別の集計はしていない。

2.8 支援・協力体制

利用者のスポーツ・レクリエーション活動に関する支援・協力体制について、「支援や協力を受けている組織はない」(51.9%)が最も多く、次いで「社会福祉協議会」(12.4%)、「障害者の当事者団体・家族会等」(11.8%)、「障害者スポーツ団体」(10.3%)であった(図表 3-29)。「その他」(10.7%)は、地域の自治会やボランティア団体などであった。

図表 3-29 支援・協力体制(複数回答)



図表 3-30 支援・協力体制(障害種別)(複数回答)

	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=348	N=868
行政	8.3%	10.9%
社会福祉協議会	14.1%	11.8%
障害者スポーツ団体	12.6%	9.3%
スポーツ団体	3.4%	4.5%
障害者スポーツ指導者組織	4.9%	4.0%
障害者スポーツ施設	6.3%	3.3%
公共スポーツ施設	4.3%	9.6%
障害者の当事者団体・家族会等	8.9%	13.0%
その他	8.3%	11.5%
支援や協力を受けている組織はない	55.2%	50.6%

注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各 2 施設であったため、障害種別の集計はしていない。

スポーツ関連の有資格者の有無別にスポーツ・レクリエーション活動に関する支援・協力体制を見ると、スポーツ関連の有資格者ありの施設では、有資格者なしの施設に比べて、「行政」「社会福祉行議会」「障害者スポーツ団体」「スポーツ団体」「障害者スポーツ指導者組織」「障害者スポーツ施設」「公共スポーツ施設」において高い割合を示した。(図表 3-31)

図表 3-31 支援・協力体制
(スポーツ関連の有資格者の有無別)(複数回答)

	スポーツ関連の 有資格者あり	スポーツ関連の 有資格者なし
	N=253	N=584
行政	11.9%	8.9%
社会福祉協議会	15.8%	11.8%
障害者スポーツ団体	22.5%	8.2%
スポーツ団体	11.5%	3.4%
障害者スポーツ指導者組織	13.0%	3.3%
障害者スポーツ施設	13.8%	3.9%
公共スポーツ施設	13.0%	7.5%
障害者の当事者団体・家族会等	13.0%	13.0%
その他	11.1%	11.1%
支援や協力を受けている組織はない	38.7%	52.9%

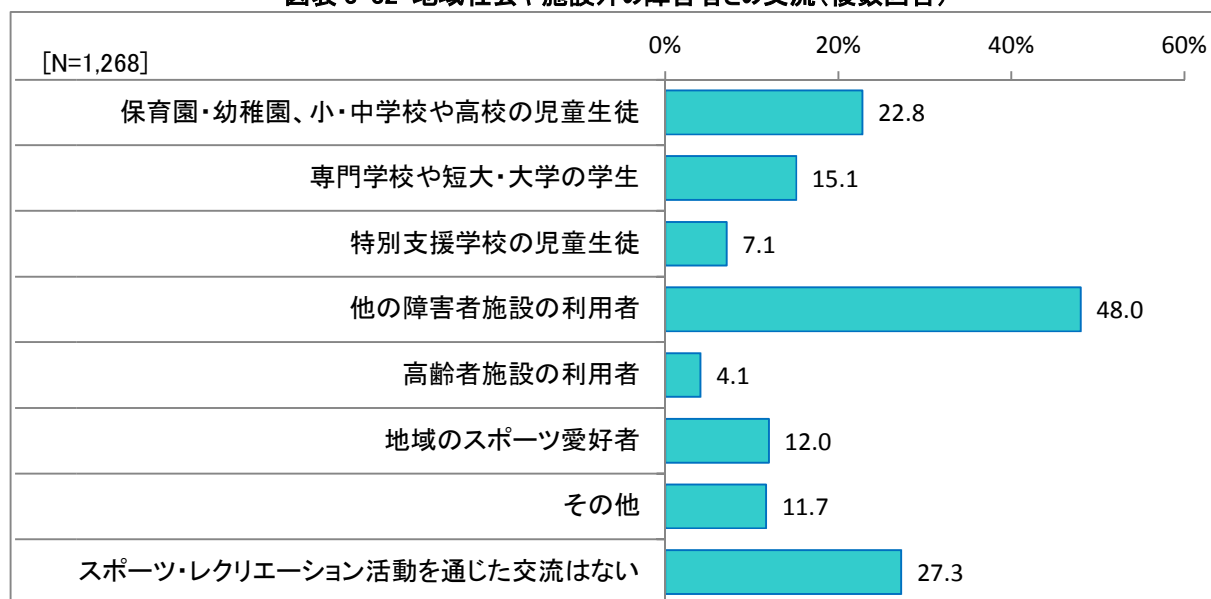
注) 担当者について、日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員、日本体育協会公認スポーツ指導者、スポーツ推進委員、健康運動指導士・健康運動実践指導者、日本レクリエーション協会公認福祉レクリエーション・ワーカーのいずれかに回答した場合は「スポーツ関連の有資格者あり」とし、特になしと回答した場合は「スポーツ関連の有資格者なし」とした。

2.9 地域社会や施設外の障害者との交流

スポーツ・レクリエーション活動を通じた地域社会や施設外の障害者との交流について、「他の障害者施設の利用者」(48.0%)が最も多く、次いで「スポーツ・レクリエーション活動を通じた交流はない」(27.3%)、「保育園・幼稚園、小・中学校や高校の児童生徒」(22.8%)であった(図表 3-32)。「その他」(11.7%)は、地域の自治会やボランティア団体などであった。

障害種別に見ると、知的障害が過半数の施設では、「他の障害者施設の利用者」が5割に達しており、外部のスポーツ大会参加による他の施設利用者との交流や同一法人内における交流が行われている(図表 3-33)。

図表 3-32 地域社会や施設外の障害者との交流(複数回答)



図表 3-33 地域や施設外の障害者との交流(障害種別)(複数回答)

	身体障害が 過半数の施設	知的障害が 過半数の施設
	N=360	N=886
保育園・幼稚園、小・中学校や高校の児童生徒	21.9%	23.3%
専門学校や短大・大学の学生	15.6%	14.9%
特別支援学校の児童生徒	6.4%	7.3%
他の障害者施設の利用者	41.9%	50.9%
高齢者施設の利用者	3.9%	4.1%
地域のスポーツ愛好者	9.2%	13.2%
その他	13.1%	11.2%
スポーツ・レクリエーション活動を通じた交流はない	32.2%	24.9%

注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各 2 施設であったため、障害種別の集計はしていない。

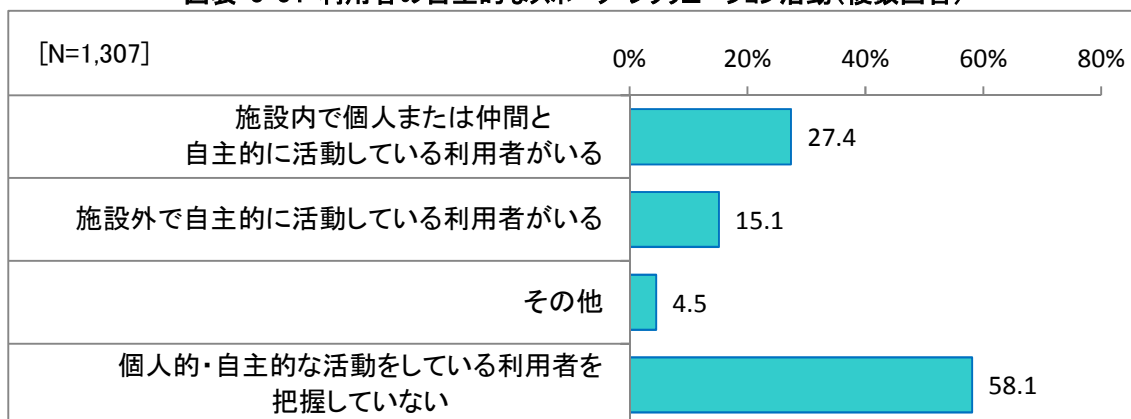
2.10 利用者の余暇や休日における自主的なスポーツ・レクリエーション活動の状況

(1) 利用者の自主的なスポーツ・レクリエーション活動の状況

利用者の余暇や休日における自主的なスポーツ・レクリエーション活動の状況について、「個人的・自主的な活動をしている利用者を把握していない」(58.1%)が最も多く、次いで「施設内で個人又は仲間と自主的に活動している利用者がいる」(27.4%)、「施設外で自主的に活動している利用者がいる」(15.1%)であった(図表 3-34)。

障害種別に見ると、知的障害が過半数の施設の方が「施設内で個人又は仲間と自主的に活動している利用者がいる」割合が高く、身体障害が過半数の施設の方が「施設外で自主的に活動している利用者がいる」割合が高い(図表 3-35)。

図表 3-34 利用者の自主的なスポーツ・レクリエーション活動(複数回答)



図表 3-35 利用者の自主的なスポーツ・レクリエーション活動(障害種別)(複数回答)

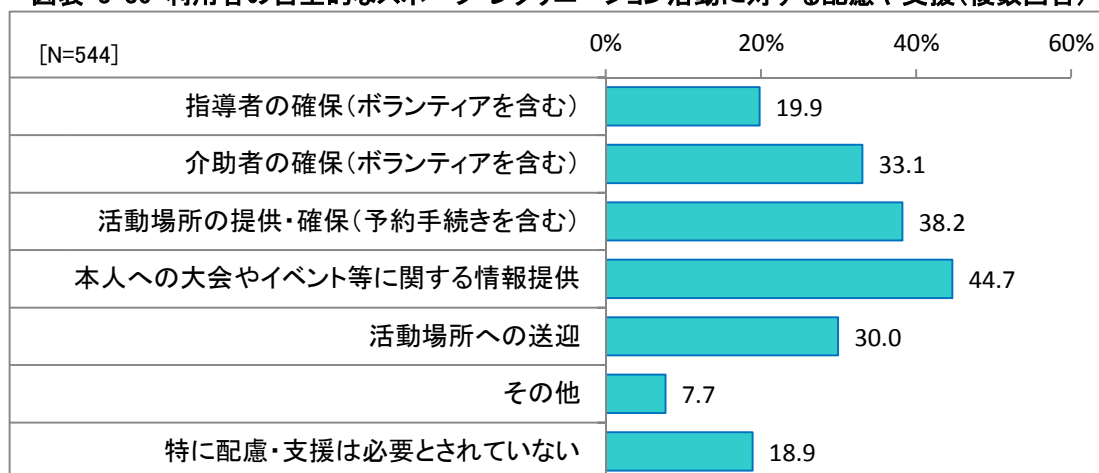
	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=379	N=902
施設内で個人または仲間と自主的に活動している利用者がいる	22.4%	29.4%
施設外で自主的に活動している利用者がいる	20.3%	12.4%
その他	3.7%	4.9%
個人的・自主的な活動をしている利用者を把握していない	60.4%	57.5%

注)精神障害及び難病等が過半数の施設は各2施設であったため、障害種別の集計はしていない。

(2) 利用者の自主的なスポーツ・レクリエーション活動に対する配慮や支援

利用者の余暇や休日における自主的なスポーツ・レクリエーション活動に対する配慮や支援について、「本人への大会やイベント等に関する情報提供」(44.7%)が最も多く、次いで「活動場所の提供・確保(予約手続きを含む)」(38.2%)、「介助者の確保(ボランティアを含む)」(33.1%)であった(図表 3-36)。

図表 3-36 利用者の自主的なスポーツ・レクリエーション活動に対する配慮や支援(複数回答)



図表 3-37 利用者の自主的なスポーツ・レクリエーション活動に対する配慮や支援(障害種別)(複数回答)

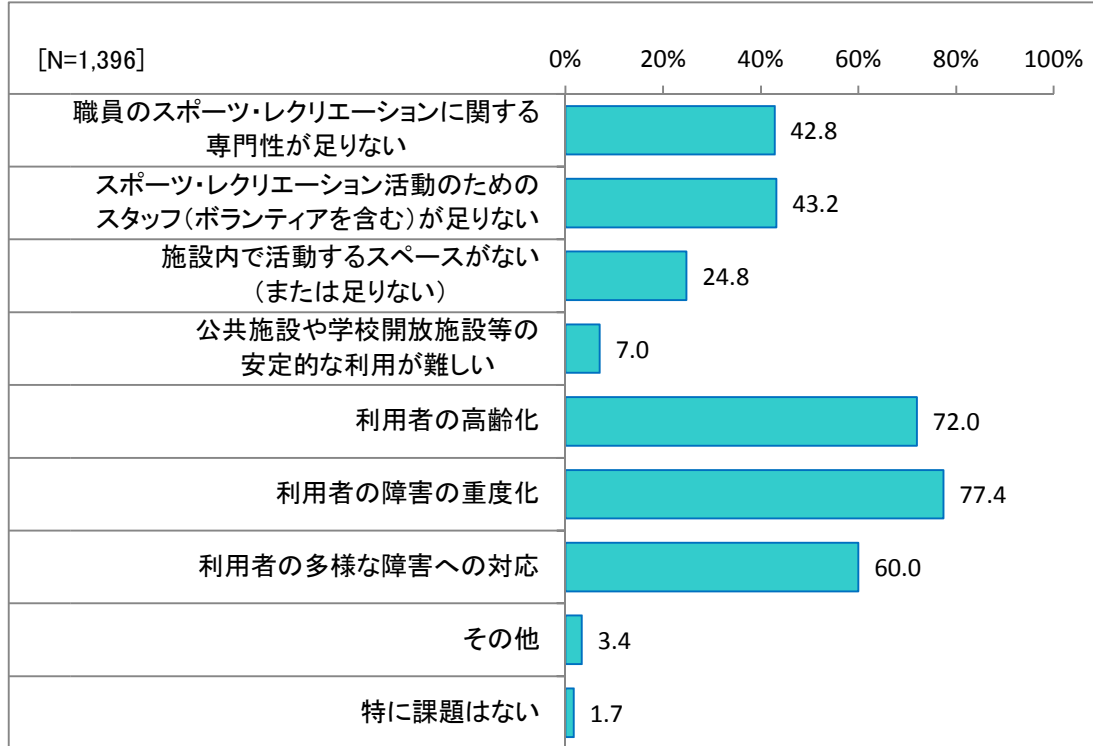
	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=148	N=381
指導者の確保(ボランティアを含む)	16.2%	22.0%
介助者の確保(ボランティアを含む)	35.1%	32.3%
活動場所の提供・確保	37.2%	38.1%
本人への大会やイベント等に関する情報提供	51.4%	41.5%
活動場所への送迎	23.6%	32.8%
その他	6.1%	8.4%
特に配慮・支援は必要とされていない	21.6%	18.4%

注)精神障害及び難病等が過半数の施設は各2施設であったため、障害種別の集計はしていない。

2.11 スポーツ・レクリエーション活動全般に関する課題

スポーツ・レクリエーション活動全般に関する課題について、「利用者の障害の重度化」(77.4%)が最も多く、次いで「利用者の高齢化」(72.0%)、「利用者の多様な障害への対応」(60.0%)であった(図表3-38)。また、4割の施設が「職員のスポーツ・レクリエーションに関する専門性が足りない」「スポーツ・レクリエーション活動のためのスタッフ(ボランティアを含む)が足りない」と回答している。

図表 3-38 スポーツ・レクリエーション活動全般に関する課題(複数回答)



図表 3-39 スポーツ・レクリエーション活動全般に関する課題(障害種別)(複数回答)

	身体障害が過半数の施設	知的障害が過半数の施設
	N=405	N=963
職員のスポーツ・レクリエーションに関する専門性が足りない	41.5%	43.7%
スポーツ・レクリエーション活動のためのスタッフ(ボランティアを含む)が足りない	47.4%	41.7%
施設内で活動するスペースがない(または足りない)	26.4%	24.0%
公共施設や学校開放施設等の安定的な利用が難しい	6.4%	7.2%
利用者の高齢化	67.9%	74.8%
利用者の障害の重度化	79.5%	77.4%
利用者の多様な障害への対応	59.3%	60.6%
その他	5.2%	2.6%
特に課題はない	1.7%	1.3%

注) 精神障害及び難病等が過半数の施設は各2施設であったため、障害種別の集計はしていない。

3. 調査結果(事例調査)

全国の障害者入所施設におけるスポーツ・レクリエーション活動の状況を明らかにするため、特徴的な施設に事例ヒアリング調査を行った。

図表 3-40 事例調査で対象とした障害者入所施設

所在地	施設名	定員	入所者の障害種別	特徴
静岡県	社会福祉法人 あしたか太陽の丘 障害者支援施設 かぬき学園	40人	身体障害が 過半数	敷地内の体育館を活用し、ボッチャ大会を自主開催 スポーツ大会を通じて他の施設や地域の障害者と積極的に交流 静岡ボッチャ協会と連携・協力
千葉県	社会福祉法人 福葉会 障害者支援施設 富里福葉苑	50人	知的障害が 過半数	自転車、陸上、ソフトボール、フライングディスクなど、さまざまな種目の クラブ活動を展開 障害者スポーツ大会だけではなく、一般のスポーツ大会にも積極的に参加 日本競輪学校、日本競輪選手会千葉支部からの支援・協力
千葉県	社会福祉法人 槇の実会 障害者支援施設 ひかり学園	50人	知的障害が 過半数	年間を通じてさまざまなスポーツ大会に積極的に参加 担当者(元トップアスリート)の競技経験を活かした専門的なスポーツ指導 を実施 近隣の学校や公共スポーツ施設などの支援

社会福祉法人あしたか太陽の丘 障害者支援施設 かめき学園

敷地内の体育館を活用し、ボッチャ大会を自主開催
スポーツ大会を通じて他の施設や地域の障害者との積極的な交流
静岡ボッチャ協会と連携・協力

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1977年、静岡県により県東部地区の総合社会福祉拠点として、各種障害者福祉施設の建設が始まる。同年、社会福祉法人あしたか福祉会を設立(現、あしたか太陽の丘)。

1979年、身体障害者更生施設として「かめき学園」を開設し、現在の身体障害を主とする障害者支援施設に至る。個々のニーズに応じて、日常生活での介護から地域生活移行に向けた幅広い支援を行っている。

なお、同法人はかめき学園などの各種障害者福祉施設の他に、研修センター、体育館、グラウンドなどを備えており、広く地域に開放している。

(2) 事業内容・定員

施設入所支援(40人)、生活介護(40人)、短期入所(5人)

(3) 職員数

常勤職員(26人)、非常勤職員(3人)

(4) 利用者の状況

現在の施設入所支援サービスの利用者は41人であり、平均年齢は54.2歳(最年少30歳、最高齢76歳)である。

開設当初から、主たる障害は身体障害であるが、利用者の約3割が療育手帳と身体障害者手帳を保有している重複障害者である。単一障害者の利用申込みは少なく、知的障害又は精神障害との重複障害が多い。

開設時は就職を目指す通過施設としての役割を果たしていたが、10年ほど前から特別支援学校卒業後に直接地域で就労できる体制が整ってきたこともあり、重度者の利用が増えている。平均入所期間は10年程度であり、年間3人前後の入退所がある。

2. スポーツ・レクリエーション活動の実態

(1) 目的と基本方針

スポーツ・レクリエーション活動を通じて、施設利用者の健康維持や生活に潤いを提供するとともに、利用者同士や担当職員とのコミュニケーションを図ることを目的としている。そのため、「参加できない人を作らない」を心掛けており、利用者全員に喜ばれるスポーツ・レクリエーションを第一に支援している。

(2) スポーツ・レクリエーション活動に関連する行事の開催

□あしたか杯（かぬき学園ボッチャ大会）

外部の大会に参加できない利用者も含めて全員が競技会の雰囲気を楽しめるようにするため、法人敷地内にある体育館を利用し、ボッチャの大会を自主開催している。

開催に当たっては、静岡ボッチャ協会や静岡ボッチャ大会関係者の協力を得て大会の広報を行っており、近隣の三島市や富士宮市のボッチャクラブ、県内のボッチャチーム、個人など、外部からの参加者を受け入れている。なお、静岡ボッチャ協会からは、広報以外にも審判や用具の貸し出し等の協力も得ている。



あしたか杯

□スポーツ大会

同法人の隣接する障害者支援施設(身体障害者)と合同でスポーツ大会を開催している。実施競技は、玉入れ、ボール送りなどを中心に、利用者の状況に合わせて独自にルールをアレンジしている。参加者の体力を考慮し、午前中は各種競技を行い、午後からはカラオケなどの文化的活動を取り入れている。

□三施設交流会

静岡県東部地区の3施設(かぬき学園、中伊豆リハビリセンター、伊豆リハビリセンター:旧体系の身体障害者更生施設)による交流会を開催している。3施設が交代で当番施設となり、各施設の特色を踏まえて交流会を開催している。主な実施競技はボッチャ、ふうせんバレー、輪投げ、オセロ、将棋などであり、利用者の嗜好(しこう)に合わせて様々な種目を取り入れている。

(3) 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加

□わかふじスポーツ大会（静岡県障害者スポーツ大会）

静岡県障害者スポーツ協会が主催するスポーツ大会である。毎年、希望者を募り参加している。主な出場競技はボッチャ、フライングディスク、ビーンバック投げ、スラローム、200メートル走、ソフトボール等である。



わかふじ大会

□静岡ボッチャ大会

静岡ボッチャ協会主催の大会である。希望者を募り参加している。

□高校野球静岡県予選大会の観戦

毎年、希望者を募り観戦を行っている。例年の行事となり、球場側の配慮から、場所の確保やテント・日よけの用意などの協力を得ている。

(4) 日常生活におけるスポーツ・レクリエーション活動

図表 3-41 日常生活におけるスポーツ・レクリエーション活動(かぬき学園)

活動頻度	週2回(主に火・木の午前中)
参加形態	任意参加(半数以上が参加) <ul style="list-style-type: none">・ 毎回の参加者は20~30人程度である。・ 活動に参加しない利用者は3割程度である。 (他の人と行動するのが得意ではない人、他の活動に参加している人など)・ 通所の利用者も同じ活動をしている。
実施種目	ボッチャ、フライングディスク、散歩、ベンチサッカーなど <ul style="list-style-type: none">・ 大会前にはそれぞれの参加競技の練習を行う。・ ボッチャ等に参加できない人も、同じスペースで音楽に合わせてダンスをするなど、その場の雰囲気を感じられるように配慮している。
活動場所	施設内の多目的ホール、敷地内の体育館、敷地内の屋外スペース <ul style="list-style-type: none">・ 天気が良く暖かい時期は敷地内の体育館で活動し、冬場の寒い時期は施設内の多目的ホールで活動している。

(5) 担当者と資格

主に作業療法士1人(障害者スポーツ指導員初級、静岡ボッチャ協会役員)が指導に当たり、その他に職員5~6人がスポーツ・レクリエーション活動全般のサポートをしている。

また、年1回、静岡県障害者スポーツ協会の巡回指導を利用しており、スポーツ・レクリエーション活動の充実と担当者の支援技術向上を図っている。

(6) 運営上の工夫

施設開設当初は就労を目指す施設として、作業中心の機能訓練的要素が強かったが、10年ほど前から障害の重度化が進み、作業に参加できない人に対する支援として、スポーツ・レクリエーション活動を取り入れ始めた。

利用者を寝たきりにしないことを目標に、各自の体力に合わせてできるだけ活動するように働きかけており、開始前には、利用者が自主的に参加しやすいように、明るく前向きな声掛けに努めている。

レクリエーションとして楽しみながら活動する日もあれば、既存のルールの下試合を行い、競技性を高める日もある。同じ種目でも、用具の工夫、自助具の導入、介助者を付けての競技などの工夫により、全員が参加できるよう配慮し、利用者のスポーツに対する興味・感心、集中力を高めている。大会がない時期は、利用者の希望に応じて種目を決めることもある。

(7) 支援・協力体制

静岡ボッチャ協会や静岡県障害者スポーツ協会からは、用具の貸し出しや広報活動などの協力を得ている。あしたか杯などの大会開催時には、施設で実習を行った学生がボランティアとして参加している。

(8) スポーツ・レクリエーション活動の課題

職員は施設の他の業務で手一杯の状況であり、活動の更なる充実のためにはスポーツ実施に関する外部のサポートを必要としている。利用者の高齢化、重度化が進む中で、スポーツ活動全般が縮小傾向にならないように、スポーツの利点を法人内外にアピールすることが重要であると考えている。

また、施設利用者の生活に張り合いが生まれるように、スポーツを通じて外部の人と交流する機会をいかに増やしていくかを課題としている。

**社会福祉法人あしたか太陽の丘
障害者支援施設 かめき学園**

○所在地：静岡県沼津市宮本 5-2

○設立年：1979 年

○定員：40 人

社会福祉法人福葉会 障害者支援施設 富里福葉苑

自転車、陸上、ソフトボール、フライングディスクなど、様々な種目のクラブ活動を展開
障害者スポーツ大会だけではなく、一般のスポーツ大会にも積極的に参加
日本競輪学校、日本競輪選手会千葉支部からの支援・協力

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1980年、知的障害者授産施設「富里福葉苑」として開設し、2012年に新体系の障害者支援施設に移行した。施設利用者の社会的自立に向けて、全面性・反復性・漸進性・意識性・個別性を5大原則とし、作業訓練、生活支援、健康支援を実践している。

(2) 事業内容・定員

施設入所支援(50人)、生活介護(67人)、短期入所(4人)

(3) 職員数

常勤職員(29人)、非常勤職員(1人)

(4) 利用者の状況

現在、施設入所支援サービスの利用者は50人であり、短期入所者を含めて合計71人が利用している。入所者の平均年齢は40.1歳(最年少19歳、最高齢83歳)である。

地域移行を目標に生活や就労に関する支援を行っているが、受入れ企業の数が少ない等の問題から、実際には職を得て自立することが困難な場合が多い。そのため、入所期間が長期にわたる利用者が多く、福祉的就労を通じて施設内での生活を続けている。

2. スポーツ・レクリエーション活動の実態

(1) 目的と基本方針

施設利用者の体力・健康の維持、施設内の閉塞感の解消や情緒の安定を図ることを目的に、日常生活の中で積極的にスポーツを取り入れている。

また、施設として地域社会に知的障害を広く認知してもらうことが重要であると考えており、地域のスポーツ大会等に積極的に参加している。各種大会に参加することにより、大会運営者や他の施設の参加者、ボランティア、地域住民と接する機会を作ることができ、利用者の社会参加につなげている。

(2) 日常生活におけるスポーツ・レクリエーション活動

□クラブ活動

図表 3-42 日常生活におけるクラブ活動(富里福葉苑)

活動頻度	週1回程度(曜日によって活動種目をわけている。)
活動形態	任意参加(選択制)
備考	各自好きなクラブを選択している。 複数のクラブを掛け持ちしている利用者もいる。

図表 3-43 主なクラブ活動(富里福葉苑)

クラブ活動	人数	曜日	主な活動場所
自転車競技部	10人	月	施設内の駐車場空きスペース
陸上部	20人	火・金	施設周辺の道路
ソフトボール部	15人	水	近隣の公園
フライングディスク部	20人	木	近隣の公園
軽スポーツ部	15人	土	近隣の公園

<自転車競技部について>

利用者の体力やバランス感覚を養うことを目的に、施設を開設して間もなく自転車競技部の活動を開始した。当初は補助輪付の自転車を利用することもあったが、現在ではピスト競技からロード競技までの自転車競技全般を行っている。

普段は施設敷地内の駐車場空きスペースにて、専用のローラーを用いて練習を行っている。かつては周辺の道路を走行していた時期もあったが、施設周辺の開発が進んできたため、現在では安全面の配慮から施設内での練習としている。

クラブとして活動を続けていく中で、日本競輪学校や日本競輪選手会千葉支部、自転車競技部がある近隣の高校などとのつながりが生まれ、今では用具の寄付や練習場所の提供など、様々な形で協力を得ている。専用の自転車やウェア、練習用具などは日本競輪学校や競輪選手から譲り受けたものを活用しており、月1~2回程度は千葉競輪場のバンクを使った練習も実施している。



自転車競技部 合宿風景

□体育活動(健康支援)

図表 3-44 日常生活における体育活動(健康支援)(富里福葉苑)

活動頻度	週3~4回(月・水・木・土)
活動形態	全員参加
活動内容	マラソンや駅伝など施設の周りを走る。 重度者、高齢者はウォーキングや散歩を実施。
備考	自立、就労の観点から、健康を保つことが重要であると考えており、クラブ活動とは別に体育活動(健康支援)というかたちで体を動かしている。 各大会前などには、クラブ活動の練習を体育活動の時間で補うこともある。

(3) 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加

開設当初は施設外での活動頻度は少なかったが、利用者の社会参加の機会を作り、地域にも活動を認知してもらえるように、少しずつ地域のスポーツ大会やイベントに参加するようになった。当時の千葉県内には障害者のスポーツ大会は少なく、市内のマラソン大会や駅伝大会などの一般健常者の大会に参加していた。現在では、愛の競輪、手をつなぐスポーツの集い、千葉県ID陸上選手権大会など、施設入所者が参加できる大会数も増え、各クラブにおける活動目標となっている。

□愛の競輪 ぼくたちの千葉記念

富里福葉苑の自転車競技部と日本競輪選手会千葉支部所属の選手による千葉競輪場の記念開催レースである。

レースの前には、出場選手の最終選考会を兼ねて、日本競輪学校や千葉競輪場にて最終合宿を行っている。自転車競技部の日頃の練習の成果を発揮する場となっているだけでなく、千葉競輪場の来場者に対して、知的障害を広く認知してもらう機会にもなっている。2013年で11回目の開催となった。



愛の競輪

□富里市ソフトボール大会

富里市体育協会ソフトボール専門部が主催する一般健常者の大会であり、障害者チームとしての参加は富里福葉苑のみである。春季大会と秋季大会の年2回、約20チームでトーナメント戦を行っている。



富里市ソフトボール大会

□手をつなぐスポーツの集い

千葉県、千葉県手をつなぐ育成会、千葉県社会福祉協議会が主催する知的障害者の運動会であり、3,000人近い参加がある。毎年、富里福葉苑では希望者を募り参加している。

(4) 担当者と資格

基本的に施設の職員が各自の競技経験を生かして指導に当たっている。自転車競技部を担当する職員は、元プロ競輪選手である(競技引退後に職員として雇用)。陸上競技部の担当職員は、日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員の資格を保有している。自転車部が競輪場で練習をする際には、現役の競輪選手から指導を受けることもある。

(5) 地域社会や施設外の障害者との交流

施設の運動会、夏祭り、文化祭、クリスマスなどの年中行事には、地域住民の参加もある。千葉黎明高校のソフトボール部、富里高校の陸上競技部、順天堂大学の陸上競技部などが、大会の運営を手伝うことがある。

近隣の公共スポーツ施設を予約して、他の障害者施設の利用者とソフトボールやサッカーなどの練習試合をすることもある。

(6) スポーツ・レクリエーション活動の課題

今後は、更に利用者の高齢化が進み、運動負荷の高い活動は実施が難しくなると予想される。状況によっては軽スポーツを活動の中心にしていくなど、個々の状況に応じたきめ細かなサービスの提供を検討している。

施設職員は、通常業務の現状維持で精一杯であり、クラブ活動にこれ以上の時間や労力を割くことは難しい状況にある。知的障害は多様であり、障害に関する知識と理解のある指導スタッフを確保することが課題である。大会運営などについては、保護者の協力も得ているが、保護者自身の高齢化も進んでいるため、家族だけではなく、一般の地域住民やボランティア希望者が継続的に参加できる仕組みづくりが必要であると考えている。

社会福祉法人福葉会
障害者支援施設 富里福葉苑

○所在地：千葉県富里市中沢 975-3

○設立年：1980年

○定員：50人

社会福祉法人榎の実会 障害者支援施設 ひかり学園

年間を通じて様々なスポーツ大会に積極的に参加

担当者(元トップアスリート)の競技経験を生かした専門的なスポーツ指導を実施

近隣の学校や公共スポーツ施設などの支援

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1992年、知的障害者入所更生施設として開設し、2012年に新体系の障害者支援施設に移行した。「一日一笑！毎日賑(にぎ)やか！」を基本理念とし、利用者も支援者も毎日が健康で安らぎのある充実した暮らしを実践している。また、利用者が多くの分野で持てる能力や潜在能力を発揮できるように、日々の生活の中でスポーツ活動や文化活動などに積極的に取り組んでいる。

(2) 事業内容・定員

施設入所支援(50人)、生活介護(50人)、短期入所(3人)、日中一時支援(10人)

(3) 職員数

常勤職員(45人)、非常勤職員(10人)

(4) 利用者の状況

現在、施設入所支援サービスの利用者は46人であり、平均年齢は41.0歳(最年少18歳、最高齢71歳)である。重複障害者は2人で、それぞれ身体障害、精神障害との重複である。また、主たる障害が知的障害であっても、自閉症、てんかんなどを伴っている利用者もいる。

開設当初から入所している利用者も20人程度おり、施設として徐々に高齢化が進んでいる。法人として、10か所のケアホームを開設しており、条件が整えば積極的に地域移行を促している(毎年4人程度)。

2. スポーツ・レクリエーション活動の実態

(1) 目的と基本方針

スポーツ・レクリエーションをはじめとする日中活動は、利用者の「心の満足」をテーマに行っている。それぞれの活動では継続練習を原則としており、各種大会に向けた練習を行っている。体力向上、技術向上、記録向上による達成感とともに、大会参加時にはひかり学園代表として参加できることの喜びを感じられるように働き掛けている。また、重度障害であっても個人の持つ能力や可能性を伸ばせるように、長期間継続的な支援を行っている。

(2) 日常生活におけるスポーツ・レクリエーション活動

図表 3-45 日常生活におけるスポーツ・レクリエーション活動(ひかり学園)

活動頻度	週2回(火・木の午後14:00~15:00)
参加形態	任意参加(選択制) ・陸上競技とフライングディスクはそれぞれ10人程度が参加している。
実施種目	マラソン(陸上競技)、フライングディスク、散歩、ソフトボールなど ・継続して実施することが重要であると考えており、毎回種目を変更するのではなく、はじめに本人や保護者と話し合い、取り組む種目を決めている。 (本人の意向や体力によって、途中で種目を変更することもある。) ・定期的に隣接している同一法人の障害者支援施設と合同でソフトボールを行っており、ひかり学園からは毎回1~2人が参加している。
活動場所	敷地内の屋外スペース、施設周辺の歩道、町営体育館など ・陸上競技は、主に施設周辺の歩道を利用している。 ・フライングディスクは敷地内の屋外スペースを利用している。 ・雨天の場合は、近隣の町営体育館を予約し、使用することもある。 ・ひかり学園の総合施設長が成田高校の陸上部コーチをしている関係から、陸上競技大会の前には高校のグラウンドで練習を行うこともある。その際、トラックの周回方向など、簡単なルールを設定することで、一般の高校生と一緒に練習を行っている。 高校の生徒や教員に知的障害を認知・理解してもらえる機会にもなっている。

(3) スポーツ・レクリエーション活動に関連する行事の開催

□ひかり体育祭

開設当初から年に1回(10月の第3土曜日)開催している法人全体の体育祭である。

施設近隣にある中村小学校の協力を得て、天候に応じてグラウンド又は体育館を借りて開催している。毎年、区長の来訪がある他、地元の多古中学校や多古高校の生徒がボランティアとして参加している。



ひかり体育祭

(4) 外部のスポーツ・レクリエーション大会への参加

ひかり学園では、年間を通じて様々な外部のスポーツ大会に参加している(図表 3-46)。

四街道ガス灯ロードレースには知的障害者部門があるが、多古町民マラソン大会、富里スイカロードレース、香取小江戸マラソンは一般の部門のみであり、健常者に混じって参加している。千葉県ゆうあいピックや千葉県障害者フライングディスク大会には、ケアホームに移行した利用者も一緒に出場している。各種大会に参加することにより、入所者の達成感を生み出すとともに、地域に対して施設の認知度を高める機会にもなっている。



千葉県ゆうあいピック 駅伝

図表 3-46 外部のスポーツ・レクリエーション大会の参加状況(ひかり学園)

2013年	大会名称	備考
1月	多古町町民マラソン大会 千葉県ゆうあいピック駅伝	一般部門に参加
2月	千葉県知的障害者陸上教室	
3月	千葉県ID陸上競技選手権(記録会)	
4月	千葉県障害者スポーツ大会(水泳)	
5月	千葉県ゆうあいピック 千葉県障害者スポーツ大会(陸上)	
6月	富里スイカロードレース	一般部門に参加
8月	全日本障害者フライングディスク大会 全国障害者陸上教室	
9月	千葉県ゆうあいピックソフトボール選手権大会	
10月	千葉県障害者フライングディスク選手権大会 全国障害者スポーツ大会 多古町民体育祭	
11月	四街道ガス灯ロードレース	知的障害者部門に参加
12月	香取小江戸マラソン	一般部門に参加

(5) 担当者と資格

総合施設長は、競歩の元トップアスリートで、日本体育協会公認の陸上競技の上級コーチである。その他の職員にも、インターハイ優勝経験者や国民体育大会に10回出場した者など、陸上競技の元トップアスリートがいる。その他、日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導員資格(初級)を持っている職員が2人いる。

陸上競技、フライングディスクともに、毎回1～2人の職員が担当している。散歩の参加者については、重度者が多いため、始めは1対1の対応が必要となる場合もあるが、1～2年継続することにより、個別対応が必要なくなることが多い。

(6) 支援・協力体制

図表 3-47 スポーツ・レクリエーション活動を支援する主な団体・組織(ひかり学園)

区分	支援・協力機関	内容
障害者 スポーツ団体	千葉県知的障害者陸上競技協会 千葉県障害者フライングディスク連盟 千葉県知的障害者ソフトボール協会	大会開催情報の提供及び指導者や 障害者のための研修の機会の提供
障害者 スポーツ施設	千葉県障害者スポーツ・レクリエーションセンター (旧サン・アビリティーズ)	大会の情報提供及び指導者研修 の運営協力
公共 スポーツ施設	多古町営体育館 横芝光町陸上競技場	活動場所の提供
高校	多古中学校、多古高校 成田高校、佐原高校	ひかり体育祭のボランティア 陸上の練習など
大学	日本大学、東京農業大学の陸上部など	マラソン大会の伴走など

(7) スポーツ・レクリエーション活動の課題

元トップアスリートなど、競技経験が豊富な職員もいるが、職員の異動やシフト制勤務により、専門性の高い職員が常に担当できるとは限らないため、その他の職員についてもスポーツ指導の専門性を高めていきたいと考えている。スポーツ・レクリエーションに関連する研修を積極的に受講していきたいが、その他の業務もあり現状では難しい。

活動場所については、雨天時に使用している町営体育館が、施設から約5km離れているため、車での往復移動で活動時間が削られてしまうという課題がある。

入所者の高齢化に伴い、陸上競技やフライングディスクから散歩に種目を変更する利用者もおり、アクティブな種目から遠ざかってしまう傾向がある。そのため、既存の競技種目のアレンジやレクリエーション種目の導入が必要であると考えている。

社会福祉法人楨の実会 障害者支援施設 ひかり学園

○所在地：千葉県香取郡多古町北中 1309-160

○設立年：1992年

○定員：50人